

彙報

新著紹介

教育學研究會

四月二十八日午後六時より

大阪市視學 山城儀重氏の

歐米の新教育學校

に關する講演ありたり。

倫理學例會

五月二十五日(金)午後六時より

學生集會所に於て

理學部講師 山本宣治氏の

「性の倫理に關して」なる講演ありたり。

心理學讀書會

五月二十七日午後三時より

心理學實驗室に於いて

野上教授の

Mail. Science

根本佛典の研究

文學士 長井眞琴著

漢譯佛典が佛教研究の主要な資料である事は言ふまでもない、併し現存漢譯の由來を考へその性質如何に想到する時私違はそれのみ依りて佛教の根本的研究を遂行すべく一種の不安を感じざるを得ない、茲に於てか本文批評、原典研究の必要は起り來るのである、而して現存原典亦必ずしも正眞なる原典ではなく、その由來性質は漢譯と畧その趣を同じうする。嚴格の意味に於て原典批判の業その難きや贅言を須たす。

著者長井眞琴氏特に巴利原典の研究に没頭せらるゝ事多年、本書は著者が特に律藏の研究に關して獲られた「副産物」といふのであるが、しかしたとへば漢譯善律が古來四分律の註釋なりと見誤られた理由や、その漢譯中差誤のある點を該本譯出後一千四百有餘年の今日指摘せられ事などはたしかに著者が「今日までの學究的生活の記念」として「新發見」といふ「大快事」な味はれた一の記念塔でなくてはならない、著者は勿論巴利原典研究者ではあるが決して原典に拘泥うて居ない、その漢巴比較研究の公平なる態度には讀者をして一種の嚴肅さを感じしめる底のものがある。

一、「巴利語に就いて」はそれが佛時代の摩竭陀國語に最も近いものであらうと想像し、梵文阿含經の發見されたものがあるが、併し根本佛典の研究上巴利本の價值は毫も輕減せざるのみならず巴

利本を無視しては完全なる研究は遂げ難いと言言して居らるゝ、正に然るべき事である、が著者が梵本を以て巴利本の不器用なる翻譯と見たテルダース意見に依りて「そのやうなものでなからうか」と想像されたのは如何であらうか、一體梵本が巴利本の譯であると見るナルダースの考には早計の感がないではなからうか、梵兩巴本の間に原譯關係を成立せしむるにはまだ大に研究の餘地があるやうに思はれる。二、「根本律藏の研究」は主として内容と成立とに就いて述べられたものであつて、先づ資料を擧げ、律藏の成立は學處が中核なる事を示し最後に律藏中に於ける罪科を說明して居らるゝが、特にその中 Parivāsa (波羅摩) はテルダースが Parivāsa に見た説を排し、Parivāsa なるべしとし、その意義が Parivāsa ならんと思はれたのは、定説とすべくまた餘地があるかも知れないが、しかし兎に角著者の一見識として價値のあるものであらうと思ふ、尙學者間に問題となつて居る Saṅgādhāra (僧伽臘施沙) や Saṅgādhāra (僧伽婆尸沙) との意義上の關係に就て漢巴兩本比較の研究が行はれて居るがこれ亦興味のある研究だと思ふ。三、「善見律毘婆沙とサマタバ・サテイカ」との對照研究」に於て著者はその獨特の見識を發表したのであつて善見律が四分律の註釋にあらざる事を述べ、漢譯との比較に於ては實に嚴密を極め、立論堂々漢譯を訂正し、最後に漢巴兩本對照表を附せるが如き如何に著者苦心の力作であるかを想像せしめる、實に本書の中堅とも謂つべきものである。四、「優婆塞五戒の研究」に於ても亦漢巴兩本詳細に之を比較し、その本著を新説し。五、「婆羅提木叉中の二戒に就いては」不偷盜戒及

び不妄語戒に關して之を論じ。六、「單酒禁制の巴利典籍」及び七、「佛教の威儀に就いて」は勿論研究ではあるが、他面佛教根本精神の應用方面に論及し佛教が徒らに高遠幽玄の教義のみを説くものにあらずして、實際生活に關する事甚大なるを論じ、これに依りて著者の佛教道德の一面を察知する事が出来るやうに見られる。次に八、「巴利律藏中の本生話的要素」を説き。九、「解脫道論とヴィスツテイマツカとの對照研究」に於ては論の著者なる優婆底沙が普通に通考へらるゝ舍利弗の事にあらずして、師子國に於ける摩醜陀以後の師資相承の系統中に現はるゝ一龍象 Dāṇḍiya なりと考證し、大史に依れば Vasudha (婆娑婆王) の治世年代が 畧西紀六十六年なるを以て彼れと同時代の Mahāpaddana の師なる Upatissa の年代はそれによりて知られ、もしこの論が果して彼れの著とすればその著作の年代も案知せらるゝと述べ、漢巴兩本比較の結果、この論とヴィスツテイマツカとが同一物なる事を指摘し、そして漢本は巴利本より古い形式を傳へて居ると論じて居らるゝ、この項亦第三項と共に就中著者の力作に係るものと思はれる。次に十、「四禪定の根本的解明」を試み最後に、十一、「佛像崇拜の起原如何」を論じて本書の本論は終りを告げて居る。尙卷末に百二十頁を費して巴利善見律序文の和譯を附録として載せられて居るが、これ亦學界を利する事尠からざるものがある。

以上は極めて管見的な紹介に過ぎないが、鈴木博士の跋文にもある如く、本分は各編夫々獨立の論文であるが、しかも論文を勝手に配列したのではなくて、全部十一編の間」には相當な順序がついて居、本書に依りて巴利原典特に律部の性質如何も之を窺ふ

事が出来佛教研究者にまりて實に近來の快著たるを失はない。誠に佛教の根本的研究は難中の難事業であるが、その難事業をしかも「小面倒な方面から進んで」原典批判の立場から公平に「巴利佛教の全野を開拓しよう」とせられ「て居る著者に謹んで敬意を表する。妄評多謝。(本田義英)

(東京天地書房發行、菊版四二二頁、定價金參圓八十錢)

寄贈書籍雜誌

沈黙の自殺者

暁鳥 敏 著

香草社 發行

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、教育研究、内外教育評論、學校教育、教育、教育時論、教育會、日本心理學雜誌、支那學、講座、